

## ガリヴァーと乃木大将

*Junko Higasa 2015.6.20*

漱石『こころ』で乃木大将のことを考えた時、ふとスウィフト『ガリヴァー旅行記』を思い出した。ガリヴァーは、最後に訪ねたフイヌム国という馬の国で、理性的な馬にヤフー（人間）の卑しさを教えられる。家に帰ったガリヴァーは、自分もヤフーという生物であることを恥じ、人間よりも話の通じる馬たちと話し合っただけで仲睦まじく暮らした。自宅よりも大きい厩舎で、馬を愛して労った乃木大将にも、馬との親密な語らいの時間があっただろう。

さてこの時代、馬というと軍馬である。日本馬は小柄で気性が荒いため、体躯、速力、耐久・耐候性に優れた温厚・従順なアラブ種が軍馬となった。乃木大将の馬たちもその血統である。そして戦場では、人間の命は馬に委ねられ、馬の命は人間に捧げられる。互いを思いやれば信頼と理性と愛情が生れる。

スウィフトは我欲で戦争を始める人間の卑しい感情と、戦場で人間の命を支えている馬の気高い理性を比べることによって、人間の理性と感情を評した。

乃木大将は、単なる馬好きだったとしても、その心底には「生死を共にする者」という覚悟から生まれる同志愛が充ち満ちていたのではないだろうか。

強欲な人間の感情で駆り出される、理性を持った人間たちと、賢い馬たちは、共に命を支え合いながら戦わなければならない。それは悲劇である。理性を超える感情は醜く、「従順」は美しくも悲しい。